

成果報告書

記入日 2023年 3月 5日

フリガナ：(いまじょう なおひこ) 氏 名： 今城 尚彦	渡航先国名 トルコ共和国	留学先の所属機関：ウスキュダル大学 帰国後の所属機関：東京外国語大学
研究テーマ：アレヴィーに見る現代トルコの「世俗」と「宗教」の動態		
研究期間： 2021年 9月～ 2022年 11月(1年2ヶ月)		
研究成果(概要) 博士論文「聖者の町の平穏と不穏：トルコ共和国ネヴシェヒル県ハジュベクタシュ郡における信仰の状況と人間関係(仮)」の執筆における最も重要な一連のデータを得ることができた。		
研究成果(詳細) - 博士論文のタイトルにある「聖者の町の平穏と不穏」とは > 調査地に眠る13世紀の聖者で、アレヴィーやベクタシーの人々がトルコ国内外から参詣に訪れるハジュ・ベクタシュ・ヴェリの肖像画(図1)で描かれているモチーフから着想を得たもの > 肖像画には、聖者の腕に抱かれたライオンとガゼルが描かれている。 ◇ これは通常は共存できない二者が共存することのできる場所であることを象徴している(一方は肉食動物、獰猛、捕食者、他方は草食動物、温和、被食者)。このような理想を体現することができる場所としてのハジュベクタシュ町の象徴となっている。 ◇ 論文全体を通して、ハジュベクタシュ郡を訪れる人々が必ず口にする「平穏(huzur)」は何によって生まれているのか、一方でこの土地に関して人々がなぜすれ違い続けるのかを明らかにしたい。 - 調査を行ったハジュベクタシュ郡は、トルコの宗教的少数派アレヴィーにとって最重要とも言える13世紀の聖者ハジュ・ベクタシュ・ヴェリの廟がある町である。 > アレヴィーはスンナ派が多数派であるトルコ共和国において15～20%を占めるとされる宗教的少数派。男女が同席し神と一つになることを目指すジェム儀礼(cem)や、1日5回の礼拝やラマダーン月の断食といった五行の実践を行わないことなどから「不信仰者」と非難されてきた。1970年代にはアレヴィーに対する差別意識が無神論・共産主義への嫌悪と結びついた結果、アレヴィーを狙った虐殺事件も多発した。 > しかし1990年代になるとこうした状況にも変化が生じた。多くの人々がアレヴィーであることを公言するようになったほか、都市において儀礼を行うための集会所ジェムエヴィを作る活動が活発になった。さらにはアレヴィーの権利を認めるよう政府に求める運動も活発化した。研究者はこの動きを「アレヴィー復興(Alevi Revival)」と呼び注目してきた。		

- こうした傾向は、いわゆる宗教復興的な現象の一つと考えることができるが、他方でこうした動きから距離を取ろうとする人々の動きも指摘されている [Tambar 2014]。
 - ◇ 儀礼の実践やアイデンティティ・ポリティクスに熱心になるアレヴィーの人々が増える一方で、そうした動きに対して消極的になる人々もいる。
 - ◇ 宗教復興に関する研究は、宗教に熱心に取り組む人々の様子を描いてきたが、反対に宗教に対して消極的な動きに関してはそれほど関心を払ってこなかった。
- このような状況をより詳細に検討しているのは、〈世俗なるもの〉(the secular)に関する研究である。
 - ◇ T. アサドは、物事から「宗教的な領域」を分離することで「世俗的な領域」が生じるという見方に対し、そもそもこうした二分法を生み出す前提ないし文法のようなものとして〈世俗なるもの〉を捉えた [Asad 2003]。
 - ◇ こうした前提は必ずしも中立的なものではない。例えばヨーロッパにおいて預言者ムハンマドの顔を描いた風刺画が預言者への冒瀆であるとする反発が広がる一方、そうした反発がリベラルな価値観への攻撃だと見做されることで、ムスリム・ムスリマへの攻撃へと発展することもある [Mahmood 2009]。
- 他方でトルコ共和国の世俗主義をスンナ派による迫害からの解放と捉えるアレヴィーの人々にとって、〈世俗なるもの〉は、また異なる複雑さをもって働いている。
 - ◇ 調査地のハジュベクタシュには、参詣地という土地の性格上トルコ中から敬虔な人々が集まる。参詣者たちが町に抱く愛着が大きい分、町に対する期待と批判もシビアになる。ハジュベクタシュに住む人々は外部から来る参詣者ほどには宗教的实践に熱心でなく、この状況は参詣者と町に住む人々の間に軋轢を生んでもいる。
 - ◇ その一方で、町の居心地の良さが語られる局面において、こうした敬虔さから距離を置く姿勢が見出せることもある。本調査の結果から見てきたのは、こうした二面性が共存しているというハジュベクタシュの特性である。今後の研究では、このような特徴を物語る様々な事例を分析・整理することを通じて、〈世俗なるもの〉に関する新たな視点を提供することを目指していく。

参考文献

- Asad, T. *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity*, California: Stanford University Press.
- Mahmood, S. 2009. "Religious reason and secular affect: An incommensurable divide?" *Critical inquiry*, 35(4), 836-862.
- Tambar, K. 2014. *The Reckoning of Pluralism: Political Belonging and the Demands of History in Turkey*, Stanford: Stanford University Press.



図1：聖者ハジュ・ベクタシュ・ヴェリの肖像画



図2：参詣者でいっぱいになったハジュ・ベクタシュ・ヴェリの廟内部

留学中の生活・研究でのトピックス

私が初めて調査地のハジュベクタシュを訪れたのは2015年の春休みであったが、今になって振り返れば「聖者の町の平穏と不穏」というテーマは既にその時から私の中に現れていた。当時私は学部の3年生で、春休みを活用してトルコを旅行する中で、卒業論文のテーマとして関心を持ち始めていた宗教的少数派アレヴィーのことを知りたいと、関連する場所を訪れていた。

「ハジュベクタシュはアレヴィーにとって最も重要な聖者が眠る聖地のような場所で、夏にはトルコ中から人々が集まり大変な熱気を帯びる」というのが事前に得ていた情報であった。しかし実際に訪れた私が遭遇したのは、そうした「聖地」のイメージからは大きく外れた発言であった。町に着いた翌朝朝食を食べていると、その職員の女性から、ここへ何をしに来たのか聞かれた。アレヴィーに関心があり、彼らにとってとても重要な場所を見に来たと伝えたと、「ここには何もない。私たちはジェム〔注：アレヴィーの宗教儀礼〕もやらないし、ジェムエヴィ〔宗教的な集会所〕にも行かない。デデ〔宗教指導者〕は都会に住んでいるからこの町にはいない。ジェムを真面目にやるのは外からやってくる人たちだ。そもそもアレヴィーというテーマは政治も絡んでいてすごく複雑。別のテーマを選べばよかったのに。」宗教的情熱のようなものを勝手に想像していた私は正直ショックを受けた。しかし他方では、現在は国の世俗主義政策のもとで博物館となっている聖者ハジュ・ベクタシュ・ヴェリ廟＝修道場に勤務する職員のT氏が町のことや廟について非常に情熱的に語る様子にも感銘を受けた。

表面上は儀礼や信仰、聖者への崇敬などに無関心なように見える町の人々の態度は、都市部からやってきた熱心な参詣者たちから反感を買うことが多い。しかし町での長期滞在を経て見えてきたのは、こうした人々の態度が1990年代に始まるアレヴィーの宗教復興における限界に対する批判となっている点である。昨今、アレヴィーの識者たちはこうした復興運動の基盤となってきたアレヴィー系の財団・協会の機能不全や、宗教指導者の「形骸化」などをしきりに指摘している。ハジュベクタシュの人々はこうした諸問題に対して大いに自覚的であり、これらに対するオルタナティブになろうとしている人もいる。町の経済にとっても非常に重要な信仰の問題は、人々の生活において常に重要な関心事であった。「アレヴィー復興」のこうした見えにくい側面を、博士論文では描き出していきたい。

今後の社会貢献

本研究の第一義はトルコにおける宗教的な事象を考えることにあるが、より大きな意義として、我々の生活に見え隠れする国家の影について文化人類学的に考える視座を広げることにある。なぜなら、フィールドで生起しているものごとには直接的・間接的に国家が関与しているからだ。

本研究で焦点を当てるアレヴィーの人々は、少数派であるがゆえに国家の動きに翻弄されやすい。特にトルコ共和国の国是の一つである世俗主義は、「スンナ派的価値に基づく宗教的専制」から彼らを解放したものと捉えられている反面、「イスラームの言説・実践を国家が管理し啓蒙する」性格をもつ原則でもある。そのため彼らは、国家による方針転換の一つ一つに大きく影響を受けてしまうのである。

このような状況を具体的事象から考察することは我々の視座を広げる可能性があるだけでなく、国家に翻弄される現地の人々に、現地の文化的言語から離れることなく、人類学的な観点から貢献することも可能となろう。人類学者とフィールドの人々の非対称的な関係が批判されてきた背景から考えても、このような協働関係を構築することが、日本およびトルコの社会に対しても望ましい貢献のあり方であると考えらる。